

第2回国際都市つくばの共生教育を考えるワークショップ

日時：2002年10月5日 於：研究交流センター 国際会議室

主催 つくば・インターナショナル・ネットワーク（TINの会）

テーマ：「イメージョン・プログラム（IP）の導入と実践」

講師：加藤学園 学園長 加藤正秀氏

加藤学園の沿革

大正15年、加藤ふぢ女史が設立した沼津淑徳女学院を出発点とし、現在では幼稚園から短期大学まで有する学校法人であり、日本で初めてオープン・スクール「カベのない学校」を始めたことでも知られている。同じく日本で初めて開始した英語で一般教科を教える授業は既に10年以上の実績があり現在では幼稚園から高校まで実施されている。

司会

共生教育の資料をいろいろと集めているときに、沼津市にあります加藤学園のことを知りました。共生教育の資料をいろいろ集めているときに見つけてきました。2、3年前になります。ぜひ一度見学をお願いしたいと申しあげましたところ、快くお受けいただきました。以後、加藤先生とはいろいろな機会にお目にかかることができました。加藤先生はすばらしい方ですし、加藤学園もすばらしい所でした。

イメージョン教育については、後でお話があると思いますが、国際性を身につけるため、加藤学園でも最初は英語の授業を増やそうとしたそうです。けれども、単に英語の時間を1、2時間増やしたところで、生徒の英語力が上がるわけがないのは皆さんよくご存じのことでしょう。それならば、カナダで行われていたフランス語と英語のイメージョン教育を基にして、いっそ普通の授業を英語でやってみればいいんだ、という発想になられた。でも言うは易しにして、その教育を10年にわたって行ってこられた努力、文部省等の説得など、死ぬほどの努力をして、初志貫徹でやってこられました。

このワークショップのために今回沼津市からお越しいただいたのですから、皆さん拍手でお迎えいたしましょう。

<拍手>

講演：（学）加藤学園 学園長 加藤 正秀氏

IP導入の動因

ただ今、過分なご紹介をしていただきました、加藤でございます。現在、沼津市でいろいろな試みをしている小さな私立学校の経営者であります。教育の方の責任も担っております。

私たちは、11年前、1992年にイングリッシュ・イメージョン・プログラム（IP）を導入しました。このイメージョンとは、英語で浸す、もっぱら外国

語づけにするということからきた言葉だろうと思いますが、適当な日本語訳がないのでそのまま使っております。

私たちの学校では、英語づけにする、こういう教育を11年間やってまいりまして、ようやく2年前に大学英語教育学会から特別賞をいただきました。戦後2度目の受賞だそうです。学会からもお墨付きをいただきました。

つくばからも筑波大学の杉原先生が心理学教室の大学院生共々お見えになり、アイデンティティ、あるいは心理的な問題などをいろいろ研究をされ発表されています。私どももご指導を受けております。

現在、私どもの学校は幼稚園の3歳児から高等学校の2年生まで全部で550名がこの教育を受けております。イマージョン教育というのは、日本語を母語（第1言語）とすると、ほとんどの授業を外国語（第2言語）で教えるということです。

「日本語を母語にする子供たちに対して、第2言語に英語を選び、授業をする。英語で学習させる。」という教育プログラムです。

イマージョン教育は、教科が導入される時点で行うのをアーリー・イマージョン、小学校の高学年、あるいは中等教育の段階から行うのをレイト・イマージョンと教育学者が分けているようです。この点に関しまして、私どもは幼稚園の遊びの段階からやっておりますので、アーリー・イマージョンの最たるものだろうと思います。

第2言語で学習の半分以上を教えるというのがイマージョン教育と呼ばれています。が、中には全部100%第2言語で教えるところもあります。小学校の1年生から母語による教育をしないで、だーっと100%第2言語で教える。ある程度学年が進んだら、はじめて母語で教えるところもあるようです。このやり方をカナダでもアメリカでも、実施しているところは大変な成果をあげているようです。これはトータル・イマージョンと呼ばれています。

私どもでは、小学1年生から3年生まで7割を英語で3割ほどを日本語で、主に国語ですが、教えています。4年生から6年生まではフィフティ・フィフティということで、パーシャル・イマージョンです。私どもの教育はアーリー・パーシャル・イマージョンということになります。

先ほど550名が授業を受けていると申しましたが、それに直接関与している英語圏からの外国人教師は40数名おります。それに日本人の先生たちが関係しております。

現在までの成果が今日持ってきました資料です。この資料の最後の所ですが、筑波大学の杉原先生の「浸るように英語を学ぶ」。これは正直な感想を書かれたものだと思います。それから、朝日新聞の船橋洋一論説委員の「根付く『イマージョン』英語教育」というのもあります。これらは第三者の方の観察されたありのままのイマージョン教育と言えます。

大学英語教育学会の方が、我々の現場を視察されると同時に、私どもの教師自身が研究、開発をしながら、現場の実践に携わりました。その結果いくつかの論文を出して、その内2人がアメリカの大学から学位を授与されました。そ

ういう実績もありまして、学問的にも批評に十分耐えうるものとして学会の特別賞をいただいたわけです。

1992年、我々がイマージョン教育をスタートするには、いろいろな要因と言いますか、イマージョン教育に乗り出さないと自分たちにはどうしようもない、やっていけない、というようなことがありました。また、我々はイマージョン・プログラムの導入を可能にするような条件、ノウハウも持っていました。私どもの学園について、東京大学の先生の放送をテレビでちょっと見たんですが、「加藤学園の例」と「通常の学校の例」というように分けて比較しているんです。これは、オープン・プランと現在日本で通常行われている普通の授業とを比較しているんです。

私どもでは、1992年にイマージョンを採用しましたが、その前の1972年に、日本で最初にオープン・プラン教育を採用しておりました。オープン・プラン・スクール、オープン・プラン・システム、日本に歴史がないだけに適当な言葉がないんです。オープン・プラン教育は、私どもの学校に来ていただければ分かることですが、普通の教室の4倍ぐらいの広さの教室で、その中で子供たちがテーマを与えられ、あるいは探し出してきて、三々五々別々に勉強しているの、知らない人は自習時間だと思ふようです。まあ、これがオープン・プランの教室風景ですが、自習をしているように見えるようです。

私は若いころ日本の大学を卒業して、アメリカの大学へ経済学を研究するために行っていったんです。そのときにたまたま友人に教育学とか心理学を専攻する者がいて、その友人たちに連れられてアメリカの学校を見学したんです。もう、全く日本と違うんですね。問題は自分で探すもんだ。苦労して、探して、やってみて、たとえ解答は正確でなくても、トライアル・エラーを繰り返しながら自分で解決していく。これは、アングロサクソンの方の教育の根本ではないかと思ひます。

日本の場合は、今でもそうだと思うんですが、与えられた問題をいかに早く、正確に解答するかによって席次が決まる。日本の小学校、つくばでも同じだと思ひますが、教室に必ず、「良く聞く、静かに」ということがあります。これは基本的に大切なことですが、必ずあります、そうしないと授業が、学習が成り立たないんですね。一斉画一、もっぱら注入、詰め込み。実際は注入できないけれども、そういう風な教育が主流になっております。それも大事なんですが、教育の根本は、本当に知識、技能を獲得するのは子供なんだ、そういう子供に環境、条件、教材、それから、心理的な支援、勇気づけ、相談を与えるのが教師の役割じゃないか。

教師が投げて、子供が受け取る、こういうものじゃなくて、子供が投げる、その投げ方を教えるのが教師じゃないのかな。こういう、発想が180度違った形での教育は当然オープン・プランになりました。オープン・スペースで壁のない学園。物理的な壁以外にも心理的な壁、いろいろな意味での「カベ」をなくすということです。このオープン・プランの土壌があったので、イマージョン・プログラムが可能になりました。

私たちの学校へきてイマージョン・プログラムだけを見て、とにかく言語学の先生方や教育の現場の先生などですが、それをそのまま自分たちの所へ持ってくればできるんじゃないかというんです。でも、それはできません。それはなぜかといいますと、本当に小さい子供たちに、先生は、たとえ日本語が分かって英語しか使いません。日本語で質問を受けても英語でしか答えません。日本語の分かる先生の場合でも、日本語は本当に緊急の時しか使いません。普段は日本語を使わず、英語だけで授業をする。これを、よく聞け、静かに、と、いって、「一斉画一、注入、詰め込み、トーク・アンド・チョーク・タイプ。」という形式の授業をやる。これを外国人の先生が英語でやったら、何かなんだか分からない子供たちは泣き出すか、騒ぎ出すか、おしっこに行きたくなるか。そういう状態になるのではないかと思うんです。

私たちは、一度教室革命をやっているんです。教室革命につきましては、古くなりましたが、ザカライヤという有名な教育学者がおりました。その人が『世の人たちは、いろいろな教育改革を唱え、実践している。しかし、教育改革は教室のドアのところで止まっている。教室の中まで入ってこない。』と言っています。日本の学校でもいろいろとやっていますが、教室の中は明治時代とそんなに変わっていません。教室の外で工夫改善が行われている。子供たちが1日の大部分を過ごし、学習をする教室の中では、相変わらず一斉画一、注入詰め込み、トーク・アンド・チョーク・タイプという教育が現状だろうと思います。私どもは、それを打破するために、1972年にそういう学校を作りました。もう30年を超えております。そのオープン・プラン教育の土壌があったればこそ、イマージョン教育もできたと思います。

同時に、オープン・プラン教育は一番の理念を「個性の尊重」に置きます。当然、グローバル化の時代には子供たちも世界へ目を向ける機会が多くなり、言葉の教育も必要になってまいります。そんなことで、創立当初から英語教育をしてきました。日本語は大切な言語ですが、残念ながらたぶんローカルだろう。英語は、アメリカ、イギリスだけの言葉ではなくて、たぶん世界語になっていくだろう。そうすると英語は早くからやった方がいいんじゃないかなあ、そう考えて早期英語教育を幼稚園の時から始めました。

幼稚園は小学校より5年早く1967年に創立したんです。創立当初から英語教育をやってまいりました。しかも、研究しながら、データをとりながら、フィードバックできるようにしてやってまいりました。小学校でも同じように英語の授業を研究しながらやってきました。英語の先生方は、どうやったら1時間を効果的な学習をさせることができるか。どうすれば、子供たちが興味や関心を持って、英語を好きになって、自分で勉強するようになるか、いろいろと工夫改善するんです。しかし、どうしても限界がありました。これが、イマージョン教育を採用する動機になったわけです。

当時1週間に3、4時間英語の授業をしておりましたが、いろいろな評価をしてみますと、その歳相応の絵本も読めません。5、6年生になっても新聞も読めません。これは、親御さんが一番よくわかっていたと思うんですが、アメ

リカに連れて行ったけれども英語が通じない。先生、6年間何を教えていたんですか、なんて言われました。

でも、中学に入ってから英語の発音がいいんですね。私どもでRとLの発音がどれくらい聞き分けられるかデータを取って見たんです。悪いですけど東大の大学院生10人と私どもの生徒、アメリカの学校の生徒。そうすると、私どもの生徒の成績は、アメリカの生徒と同等だったんです。小さいときから英語を教えると、ちゃんと区別できるようになるんです。そういう成果はあったし、高等教育へ進んでも積極的に英語に取り組み、大学へ進んでも国際関係の仕事とかいろいろなことをする人が多くなりました。けれども、どうしても限界がある。

考えてみると、家庭でも、学校でも、社会でも日本語の洪水の中にいるわけですね。圧倒的に日本語を話す環境の中にいるわけです。単一民族に近い、単一言語を使う、似たような者が集まった社会ですね。そうすると、先生が学校の中でたとえ1週間に3、4時間、英語を教えてもどうしようもない。私は当時この問題を克服するために、英語を2、3時間毎日やったらどうか、と提案したんです。英語の先生は大賛成するんです。ところが、小学校の現場の先生が、算数も教えなきゃいけない、体育はどうするんですか。『先生、そもそも、ゆとりの時代でしょう。』

IP導入の準備

そこで行き詰まっちゃっておったところに遭遇したのが、カナダでも成功している、アメリカでも始めているという、イマージョン・プログラムだったんです。壁に当たっていたもんですから飛びつきました。私は経済が専門ですが、言語学者の書いたカナダの文献、アメリカの言語学者の書いたものなど多くの資料を集めました。

イマージョン・プログラムは、1960年代の初めから、カナダの英語圏で自然発生的に行われていたんです。現場の方が先行していて、どうも良いらしいよということで、学者が後追いしたんです。

カナダの英語圏ではフランス語イマージョン、フランス語圏では英語イマージョン。第2言語の実力は上がっているのか。通常の外国語として第2言語を学んだ場合と、第2言語で学んだ教科の成績はどうか。当時スペインという女の学者が膨大な研究をしていました。もう私どもが始めようとしたときには、カナダでもアメリカでも、イマージョン教育で学んだ、第2言語で学んだ教科は全て問題無し、そういう結果が出ていて論争がなくなっていたんです。

10年、20年前にさかのぼって研究し、よし、それならば現場を見に行こう、私だけがやろうと言いましても、なにしろ現場の先生方の協力を得なければどうしようもないわけです。私どもは、現場の外国人の先生と日本人の先生とで、アメリカやカナダへ視察に行きました。ところが、我々の中にはフランス語が得意でない人やスペイン語が得意でない人がいたので、アメリカのもっぱらジャパニーズ・イマージョンの学校へ行っただけです。カナダは60年代に自然

発生的にでてきて、70年代、80年代にはかなり普及して、80年代後半には国としても認定するようになっていました。アメリカは10年ぐらい遅れて、ロサンゼルス近郊でスペイン語イマージョンから始まった。私どもが行ったところには、ヨーロッパのほとんどの言語が出来ておりました。おそらく、現在では、300校、500校近くなっているんじゃないかと思います。

彼らの研究した成果というものをいろいろ勉強すると同時に、英語を母語にする子供たちに対する、ジャパニーズ・イマージョンの学校を見学しました。それがびっくりするほど日本語が上手になっている。日本語で理科を勉強して、これがかなり理解されているようだ、ということを確認しました。また私どものご父兄の中にもインテリ、学者がおりまして、一緒に見学に行きました。

よく行ったのはアメリカ・オレゴン州のユージーンという、ちょうど日本語で友人学園と書くジャパニーズ・イマージョンの学校、作って2、3年したときでした。それから、オレゴン州ポートランド、リッチモンド小学校。両校とは今でも提携し交流しています。それから、フェアバンクス。各学校にそれぞれ特色があって、それぞれ苦労しているようです。

最初、ジャパニーズ・イマージョンの学校を見学するまでは、先生たちもなかなか踏み切れなかったようです。英語とスペイン語、英語とフランス語などは、親戚関係で近い。日本語と英語の距離は非常にある。だから日本でやって大丈夫だろうか、という心配がある。ところが、ジャパニーズ・イマージョンのアメリカの学校の例を研究させていただくと、フランス語やスペイン語ほどではないんですが、けっこう日本語を習得できるんですね。日本語で習得した教科も遜色ない。そういうことが分かったものですから、それじゃひとつやってみようとなりました。

それで準備をして、1993年からはじめる予定だったんです。でも、いろいろなことが不安になりました。この資料にあります「IPの実践：当初懸念された問題点」にもいろいろ書いています。先生は英語でしか授業しません。たとえ日本語で質問されても英語でしか答えません。子供たちはパニックになって、中にはノイローゼになる者も出てくるんじゃないだろうか。よしんば英語ができて、英語で学んだ算数なんかめっちゃめっちゃにならないだろうか。将来日本の大学を受けなきゃならない。筑波大学なんてとっとも受からないだろうなあ。英語ができて他がだめですから。そのほかにもいろいろ問題があって、一番困ったのは、果たして文部省が認めてくれるのだろうか。管轄は県ですが、ここへ相談に行っても苦労をかけるだけだ。ならば相談に行くのは止めよう。指導要領違反にはならないかなあ。指導要領のどこを読んでも外国語で教えてはいけない、とは書いてありません。当たり前のことですが、授業は日本語でするものだということが作られています。これを文部省に持って行っても、なにぶんにも前例がないものですから、と断られたらどうしようか。私どもも決して無理を言おうとしているわけじゃないです。教育基本法的一条校（文部省認可の学校）として、文部省の決めた指導要領に沿ったカリキュラ

ム、教科書を使わなければなりません。

そこで、日本語の教科書を英語に翻訳したのです。全学年、すべての教科書の翻訳をしたんですよ。最初のうちは全部はできませんでした。1年から3年までだったんですが、文部省のカリキュラムどおりの教科書を準備できたんです。ここまで準備できたものですから、あまり心配してもしょうがない、1993年から導入の予定を1年前倒して、1992年に実施したのです。

I P の実践

私たちの一番の心配は、我々がいくら気負ってやると言っても、果たして子供たちが集まるだろうか。イマージョン・プログラムに入れると言って、冒険してくれる親御さんたちがいるだろうか。そこで今度は親御さんの啓蒙をやるということで、アメリカのジャパニーズ・イマージョン学校から持ってきたいろいろな記録を一生懸命に親御さんに見せました。視察に行った先生、一緒に行ってきた親御さんのなかの大学の先生の意見なども聞きました。

11月ごろには入学試験などが終わります。それで、入学を許可しました子供たちとご父兄を集めました。『このイマージョン・プログラムは、ちゃんとした準備で、きちんと行えばきっと成果が上がる。アメリカでの例を見てきました。これからやりたいと思います。30名ぐらいだったら始めようと思いますので、どちらかをお選び下さい。』イマージョン・クラスとレギュラー・クラスとを選択してもらいました。その時に入学したのは70名ぐらいだったんです。30数名づつ半々になったんです。そこで始めることにしました。その時には気がつかなかったんですが、その時の親御さんの、経済的な、社会的、文化的背景が両方のクラスともとてもよく似ていたんです。それと、入ったときの知能テストが大体同じだったんです。

イマージョン・クラスでも、算数と国語に関しては、後で日本人の先生が教えるわけです。算数を英語で教えるのですが、あとで単語だけは、「トライアングル」と憶えているけれども、日本人の先生が「三角形」と言うのですよ、と教えるわけです。そして、継続して算数と国語に関してテストしたのです。国語については、レギュラー・クラスとイマージョン・クラスとも同じ3割程度の授業時間数なのです。他の時間には、ずうっと英語を使うから日本語に接する機会の少ないイマージョン・クラスが当然国語の力が落ちるだろうと思っていました。ところが、カナダやアメリカではそうではなかったんです。我々のしたテストでも、北アメリカと同じ結果が出てくるんです。こういうデータがいろいろとあるのです。こういったことでなんとかやっていけるのではないかと確信を持てたんです。

当初イマージョン・プログラムによって子供がノイローゼになるんじゃないか、教室で耐えられなくなるんじゃないか、教師も我々も親御さんもいろいろ心配しました。ところが、親御さんたちは安心しているんです。『レギュラー・クラスには転校させてもらえますね。』『ええ、大丈夫ですよ。』セーフティ・ネットがあるんです。それを入学時に約束して、やっと30数名、冒険す

る親御さんを集めたんです。親御さんの性格なども違っていたんじゃないか。うちはもう3人目だから実験させてくれとか。うちは女の子だから適当にとか、お医者さんの子供で、医者の大学へ入れなきゃならないから、英語のクラスにするよとか。

ところが、教育に疑問を持ってイマージョン・クラスを選択しなかった子供と親御さんもいるわけです。ところが、2、3年もしますと、親御さんも少しは英語を勉強しているわけですから、黙っていても英語の力がすごいと分かるわけです。もうPRしなくてもどんどん生徒が集まる。私の記憶では、レギュラー・クラスへ移ったのは1人しかいない。それも、イマージョン・プログラムを嫌がって、というより人間関係だったです。逆にイマージョン・クラスを選択しなかった子供は、2、3年生になるとイマージョン・クラスへ移ろうと思っても、もう移れないんです。片方は英語を聞いたり、話したりするのに慣れているわけですから、差がついているんです。中には、離婚だなどという騒ぎがあったりしまして、いろいろな副産物も生まれました。

発足してようやく11年目を迎えております。この間、韓国から見学に来た学校がありました。その学校はソウルで始めました。理事長と校長がアメリカの教育を受けていて、奥さんが校長で、アメリカで先生をやっておられました。初めオープン・プラン教育を導入したいということで来られました。が、一気にイマージョン・プログラムをやっちゃおうということで始められました。なにしろソウルでは、1000万人以上の人口を抱えていますから、今ではその学校は、20倍、30倍で志願者が押すな押すなで困っている。ところが、この間理事長さんが来まして、「私立学校でこんなに潤っているのに、志願者が集まっているのに、他の学校では採用しようとしなないんですよ。なぜなんだろう。」それは、私どもも同じ気持ちでいるんです。いろいろな方にオープンに見ていただいて、みんなが採用してくだされば、日本の国内で交流できて、お互い切磋琢磨できていいんじゃないかなと思って、いろいろな機会にオープンにして、ワークショップなどで学ぶ機会を提供いただいたり、PRさせていただいているんです。それでも日本ではだめですね。四国の方で幼稚園から小学校の3年生までやっている私立学校がありますが、残念ながら苦戦しているようです。我々も成功するように、叱咤激励、協力しております。

この問題は、なんだかんだと言っても、日本の教育の主流は大学入試という点に帰着しますね。受験戦争、日本の教育の本流をずばり言っているのではないかと思います。私たちは、当初子供をバイリンガルにするという目的の一つに、大学の選択の幅を広げるというのもありました。多様性と選択の余地を広げるというのが、民主主義の基本原則だろうと思います。子供たちの日本語の壁を取り除いてやると、世界の英語圏の大学を受けられる。なにも、東大をねらわなくても、世界中にはいろいろな大学がある。これから、ハーバード大学をねらうんだという子供たちも現在おります。受かるかどうか楽しみにしています。

その前提として、国際バカロレア協会に入った方がいいというのです。私が

若いころ、60年代の終わりごろ、ニューヨークに行ったとき、日本の国連大使と文部省の次官が来ておりました。「将来日本の大学でも国際バカロレア協会に入るような学校が出たらなあ。」というのを小耳に挟んだんです。一昨年、ミディウムプログラム（小学校の5年から中学校の2年まで）に加盟しました。昨年、高等学校卒業の課程まで合格しまして、国際バカロレア協会加入を許可されました。日本では7校ほどですが、私どもの学校以外の6校は全部インターナショナル・スクールで、1条校ではありません。日本の文部省の決めた指導要領に従っていない学校です。私どもは、日本のカリキュラムを満たした上に、国際的な国際バカロレア協会の決めたカリキュラムも満たしている。去年、国際バカロレア協会の総会があったんですが、そこへ少し遅刻していったら、「加藤学園」と書いてあるんです。なにをやっているんだろうと思いますと、極東で、アジアでただ1校、その国で認可された学校で、その国のカリキュラムを満たして、同時に国際バカロレア協会の認めたカリキュラムを満たしているのは、加藤学園の暁秀高等学校、中学校、初等学校だけなのだそうです。実際はそうなって欲しい。これが、グローバル化時代の国際バカロレア協会の使命なんだと。あとで、質問されて困ったような、嬉しいような経験をしてまいりました。

今後の課題

私どもの学校も、イマージョン・プログラムに関していろいろな問題を抱えています。是非先生方に、皆様方に教えてもらいたいと思っています。私の今までの経験では、本当に成績のいい子供、将来難しい大学へそんなに勉強しないで入るような子供は、見ていると小学校の高学年になったら耽読するんです。黙っていても日本語の本をたくさん読んでいます。将来理系に進もうとも、文系に進もうとも、伸びているというのを私の経験で感じています。そうすると、イマージョン・クラスの子供たちは、ネイティブの子供たちと同じレベルで英語をやっている。世間では、小学生の読書の時間は減ってきた、という新聞報道を読んだりすると、うちの学校ではどうなのだろうか。イマージョン・クラスはあまり本を読んでいないんじゃないかと懸念していましたが、私どもの子供たちは良く読んでいます。しかしちょっと心配もしています。

それから、1年生から入っておりますので、いわゆる学力差がついている。意欲の問題もあります。先ほどアーリー・イマージョンを採用していると申しました。ならば、中等教育の段階でレイト・イマージョンを採用したら、ある程度学力の高い、意欲の高い生徒をこちらが選ぶことができる。来春は、小学校のテストで何名か落ちるわけです。あんな小さい子供だから、かわいそうでしょうがない。くじ引きでしたらどうかというと、みんなが納得しない。先生方がいろいろ基準を設けてやっているようです。それでも、こんなに学力の差がついちゃう。

レイト・イマージョンを採用したらどうか、アメリカ、カナダの例でずいぶ

ん研究しました。これは成功してるんです。中等教育の段階から、英語を第2言語として教えないで、英語で一般教科を教えるで大丈夫なのですね。しかし、問題は日本の大学入試なんです。現在イマージョン・クラスで、日本の大学を受けると決めたら、レギュラー・クラスに移るようにさせています。与えられた問題を速やかに、正確に解ける、こういう人間にしないと、効率的に学習して、実力を一定時間に発揮できるようにしないと、相当頭のいい者以外は、恵まれた者以外は、日本のいわゆる難関大学には入れない。日本の教育の癌は何ととっても大学入試だろうと思います。これは国民的課題、中高一貫教育だなんだかんだといっても、大学入試をなんとかしなければならぬと同時に、教室の中の革命をやること。それに言葉の問題。大変だけどこれからは、思い切って国民をバイリンガルにしちゃおう。残念ながら英語が世界語だから。少なくとも、香港やシンガポールの知識人ぐらいには英語を話せるようにしよう。そのためには、コストもかかるし摩擦もあるでしょうが、それによって得るところの経済的、文化的利益、すごいだろうと思います。私どものささやかな経験を日本が採用してくれたら、21世紀はまた日が昇る。ということ想像したりするわけです。

つくばへ来てこんなことを言うのはなんなんですが、スイスに国際経営研究所があり、世界49カ国の経済力比較をしているのです。これに大学のランキング比較がある。一番のランクはフィンランド、カナダ、アイルランド、アメリカです。中国、台湾、韓国、日本なんて、いわゆる受験至上主義の大学の評価は非常に低い。昨年、読売新聞が社説に、「日本の大学、特に文系はレジャーランドになっている。」と書きました。私たちは、高等学校が2校あります。この論説に対して異議を申して来た大学を知らせて欲しいと、文書を出しました。1ヶ月ぐらいたってから、読売新聞には幸いなことに、日本のためには悲しむべきことに、抗議してきた大学は1校もありません、という読売新聞の回答でした。

日本の教育の抱える問題は大きいんだなあ、と思います。本音と建前なんて言わないで、本気になって、21世紀はまた日が昇るようになるためには、思い切ったことをしなければいけないのではないかな。そのためには、金がないとか、ものがないとか言わないで、知恵を出し合って、努力すればなんとかなると思います。今、株なんかバブル後の最安値。今までは日本の政界でも財界でも指導者になった人は、与えられた問題を解くのが上手だったんですね。新しい問題を発見して、解決することができなかつたから、その結果、「失われた10年」なんてことをもたらしたんでしょう。我々の教育が我々の身边に及んで来たのかなと思います。ご静聴ありがとうございました。ご質問ありましたら、よろしくお願いします。〈拍手〉

司会

加藤先生ありがとうございました。皆様、せっかくの機会ですので、ご質問がありましたらよろしくお願いします。ご質問、意見交換をいたしたいと思

ます。挙手をして、お手元のランプを押して知らせてください。所属等を言っていたら、ご発言をお願いします。早速どうぞ。

質問：（女性）加藤学園では、大学を設立する予定はないのですか。大学があればほとんどの問題が解決すると思うのですが。

加藤講師

御殿場に短大がありますが、現在リストラしています。現在アメリカの大学と共同で、いろいろなことを準備しています。

質問：（続き）日本の大学は無理でも、外国の大学は受けられる、ということでしょうか。

加藤講師

イマージョン・クラスは別にして、ご父兄も子供たちも、日本の大学を受けるのが多いです。しかも、大学に入ってから一生懸命学習する学生が少ないんです。4年制の大学に入った学生にアンケートをとってみると、我が校の恥をさらすようですが、1日の自習時間を計算すると、1時間しかないですね。でも、全国平均は、広島大学が前にやったら、45分かかったということです。最近、マンガとか新聞を読む時間が30分と出ています。

この間、アメリカの大学院の教育学部（3分の1は、現場の教育の経験がある人たち）が来たんです。私どもの学校と公立学校を見学されて、彼らは予備校、塾がどうも理解できない。夜9時、10時に親御さんが塾の前に車で迎えに来ている姿。それで、大学へ行って勉強しないで遊んでいるということを聞いて、理解できなかったようです。

質問：（続き）加藤学園で理想的に勉強した生徒さんの中には、普通以上に優秀な生徒さんがおられると思いますが。たまたま、つくばの中学校に来ていらしたアメリカ人の生徒さんで、数学が得意で、日本ではもの足りなかったのか、アメリカの高校へ入りました。アメリカでは、高校生でもインターネットで大学の単位を修得できる高校があるそうですね。

加藤講師

ええ、そうですね。オープン・プラン・スクールをやっていた10数年前、数学のすごいのがいたんです。その生徒はアメリカの高校へ行って、なんか高校生なのに大学へ入れてもらったというのがありました。けっこういい研究している者もいるんです。それからプロになって、アーティストになっている者もいます。非常に個性豊かです。ですが、安全なサラリーマンを選ぶ者が多いんです。

質問：（続き）加藤学園では、まだシステムのそこまではしないんですか。

加藤講師

知能テストなどの結果を見て、子供を暦年齢で分けてはいけないと思い、無学年にしよう、過渡期に複式学級にしよう、ということで、1年と2年というように複式学級にしたことがあるのです。でも、親御さんの抵抗で、未だに学年制を取っています。私立学校でも現実に柔軟に対応しなければならない。で

も、理想を持って、理想を説いて、学校を経営しております。

質問：（男性）地方から東京の大学に入学させると、年間300万円から400万円かかる。これだけあれば、イギリス、アメリカへ十分留学させられるというんです。それで、日本の大学はかなり空洞化が深刻になってきています。これは、個人的な感想なんですけど、もう日本の大学は落ちるところまで落ちて、はい上がってくるよりしょうがないんじゃないか。そこで、お願いがあるんです。UWC（世界的な指導者層を育成しようとするプログラム。現在国連事務総長が責任者になっている）に認定されている日本の機関はないのです。加藤学園として、こういう資格を取る中で、国際化への手本を示していただくのが、遠回りですけども早道ではないかと思えます。

加藤講師

日本の大学に対する不満があるんです。日本語の壁と、これで受験生を困っている文部省の認可の壁。そして大学の格付け。これに入るための高校の格付けもあるんです。私は、中等教育以下の現場を見ていて、先生たちの教え方を見ていて、もう少し、子供たちの学習への興味、関心を大事にして、学んだことをしみじみと味わわせ、喜ばせ、感動するという体験をさせてやりたい。そうは言っても、大学入試をどうにかしなければいけない。ここで、引き合いに出して考えられるのは、かつて自由化前に、日本は自動車を関税で困っていたわけです。国民は、性能が悪くても、高くても国産車しか買えなかった。この障壁を除いてやれば、世界から自分の好みのものを、自分の懐具合にあわせて買える。これで、日本の自動車もよくなりました。こういう時期に日本の大学も来ているんじゃないかなあ。そのためには、文部省は柔軟に対応して、一般の大学でもバイリンガル教育をする。英語で授業をするようにすれば、世界から多くの留学生がやってきますよ。国策として国民を早くバイリンガルにすることだろうと思えます。

質問：（男性）本当に先生のおしゃるとおりで、大学院の学生を国際会議へ連れて行くと、借りてきた猫状態で役に立たないんですよ。お前ら、旅費使っただけでここまできて、黙っていてどうする、と言うのですが。いくつかの理由が考えられます。困ったことに、大学には翻訳教科書は多いんですが、原語の教科書が図書館を探してもないんです。

名古屋大学、京都大学の大学院の物理学の集中講義を頼まれたんですが、こちらの出した条件をOKするなら、してもいいといったんです。すべての講義を英語で行うといいました。そうしたら、私が5年前に行った、その物理学の英語での講義がその大学の物理学を英語でした最初の授業だというんです。情けなくなりました。加藤学園の行っている英語で授業をするという試みをつぶそうとしているのは、大学受験であり、大学自身ではないかと思っています。

加藤講師

この間、ある日本の学者が日本人に生まれて損した、アメリカ人に生まれ

ばよかった、英語を勉強するために、どれだけの時間とエネルギーを割いてきたことか、とおっしゃっていました。小さいときからイマージョン教育であれば、そんな時間もエネルギーもいらぬんですね。杉原先生の教室では、どうもバイリンガルで教育した方が考え方がクリエイティブで思考が育っているということです。小さな成功例だけで言うのもなんなんですが、アメリカでは、バイリンガル教育をイマージョンでやりたい、で、予算を増やしたんですね。日本でも思い切ったことをやっていただけたらいいなあと思います。

質問：前に、大学のランキング比較があるということですが。それはどこですか。

加藤講師

日本の財界人は注目しているのです。かつてこのランキングで、49カ国経済力比較で日本が2、3位のころがあったんです。失われた10年の前です。ところが、大学の比較では43位になってしまう。

質問：（男性）学生です。生徒さんたちは静岡県内からの方が多いいんですか。それとも県外のほうが多いのですか。

加藤講師

小学生は体力的な問題で、東は小田原、西は静岡に限っています。中には、越境してきている者が40人ほど、三島市近辺に移住してきた人もおります。また、東京から通ったのもおります。新幹線で東京から静岡まで1時間なので通学できるんです。ですが、基本は学校近辺、ご近所の方ということです。

質問：（続き）実際の授業は、外国人の先生だけで英語で教えているんですか。それとも日本人の先生と一緒に教えているのでしょうか。

加藤講師

それがですね。私どもが雇う外国人の先生は、10年以上の教師の経験者で、BSL資格まで持っておられる方もおります。でも、日本の教員免許を持っている人は二人しかいません。日本人の先生より経験も技術も上なんです。だからご自分のペースで日本の教科書を教えています。ところが、形式上は日本人の先生の補助、助手となっているんです。実際は日本人の先生にやり方を指導しているのです。こういう状態が違反となると困るので、文部大臣と直接交渉いたしまして、何とか今ではこの問題を克服しております。

質問：（男性）

加藤講師

小学校のなかでは3分の1。高等学校では半分です。家庭を含めて交流しております。地域ではどうでしょうか。学校の中で英語を使うという不自然な環境のなかでの教育なのでどうかなとも思います。

質問：（続き）お家でもなるべく英語を使うように指導されているんですか。

加藤講師

逆です。お家では正しい日本語を使ってください。なるべく多くの日本語の本を読んであげてくださいと言っています。お母様方には、なまじっか変な英語を使かわれて、癖がついても困りますので、と申し上げております。

質問：（続き）生徒は、学校内ではすべて英語で話しているんですか。

加藤講師

高等学校では、日本人の生徒同士だと日本語で話しているようです。理科などのディスカッションするときには自習時間でも英語でやっているようです。

司会：家庭へ帰りましたら正しい日本語で話をする、日本語の本を読む。家庭と学校とをきちんと分けて指導している、ということを印象深くお聞きました。いつでも学校の延長で、英語などを勉強していると、つい素人考えしておりました。

加藤講師

あのね。家庭の中を英語にしちゃっているところもあるんです。

質問：（女性）学生なんです。加藤学園に入学されている生徒さんのなかで、日本語を母語としない生徒はいらっしゃるのでしょうか。

加藤講師

5%ぐらいいるようです。

質問：その生徒さんは、逆に日本語のイマージョン教育を受けているんですか。

加藤講師

ええ、そうです。お友達が日本語を話しますから、自然に慣れるということなんです。それから今、日本語を母語にする子供たちに、お母さんたちが中国人なので、中国語イマージョンを実験的に試みています。上手くいくのではないかと考えています。

質問：（男性）授業料などはどうなっているんですか。

加藤講師

授業料は他の所より少し高くて、年間60～70万円ですか。県の補助金ももらっています。志願者も多いし、それほど授業料も高くないので、他の学校でも採用してくださいよというのですが。でも不思議なことに他の学校では採用しない。

質問：（続き）なぜ、私立学校でもイマージョン教育を採用しないのですか。

加藤講師

今ある日本の私立学校は危機意識を持っていないんです。黙っていても子供が集まりますから。10年前、20年前と同じように集まります。すると、改革しようとはしません。

質問：（男性）テキスト、参考書を英訳しているということですが、他には何かありますか。それとアメリカですと、オーストラリアとネットワークでつないでやっているところもあるようです。日本ですと、日本語ということもあり、難しいと思いますが、加藤学園の方では、どうされていますか。

加藤講師

最後の点については、インターネットで結ぼうとしてやっているんです。オレゴンとアイオワとで、まだ始めたばかりです。教科書につきましては、日本の教科書、それを英訳したもの、アメリカのもの、一部の熱心な教師は自分で作成したものも使っているようです。4種類ぐらいあります。

質問：（女性）英語イマージョン教育をやっておられるようですが、英語以外では、中国語を話す人が圧倒的に多いです。中国経済も発展しています。このような状況で、中国語に対してどういう取り組みをしているのでしょうか。

加藤講師

英語が世界語だろうと思います。インターネット時代になって決定的になりました。しかし、13億人、華僑が5000万人ですか。それと中国経済の隆盛、増強ぶりを考えると、中国語が必要でしょう。私どもの高等学校で中国語必修コースを作りました。ツールとして、手段として英語、中国語、日本語の3カ国語ができれば理想的だなあ、ということで、実験的に3カ国語イマージョン教育をやるようしているところです。どの教科を中国語にするか、英語にするか、いろいろな問題点もありますが、小さいときからやればできるかも知れないと思っています。ところが、驚いたことに、日本には第1外国語に中国語を教える高校がほとんどないんです。沖縄に国際学科ですか、1校あるだけです。

質問：（男性）加藤学園のイマージョン教育で高校生になった生徒は、自らの意志で大学を受けるんですか。

加藤講師

私どもの方で、いろいろな情報を与えています。大学は多いですし、親御さんの持っている情報には限りがありますから。親御さんの希望により、日本の大学を受けるときにはレギュラー・クラスへ移ってもらっています。

質問：（続き）とすると、高校3年生までイマージョン・クラスにいる生徒さんは日本の大学を受けずに、外国の大学を受けるんですか。

加藤講師

そうですが、日本ではICUとか上智大学とかをねらうようになるのではないかと思います。

質問：（続き）先生の話聞いていますと、外国人の先生の方が、資質、視野が優秀なような気がするんです。どちらを師と仰ぐかということになると、日本人の先生よりかは外国人の先生の方を師と仰ぐような行動を示すんじゃないかな

いかと思うんです。そうなると、学校運営上難しいというか、いろいろな面倒なことが起こるんじゃないかと思うんですが。

加藤講師

外国人の中で中心になっている先生は終身雇用に近い。モチベーションが高い。契約制ですから、優秀な先生を引っ張ってることができる。だめな先生は契約を更新しないということで、外国人の先生のモラルが非常に高い、レベルが高い。日本人の先生で外国人嫌いの人たちは触れ合いがない。しかしそうでない人は交流しているようです。これが、日本人の先生の資質、視野向上になっているかなと思います。しかし、子供たちがどちらを選ぶかは分かりませんね。

質問：（女性）加藤学園で翻訳して使っている、算数、社会、理科の教科書は手に入れることができるのでしょうか。加藤学園へ言えばいいんでしょうか。

加藤講師

ええ、私どもが選んだ教科書はあります。申し込まれば用意できます。が、申し訳ないことに予算がないので、写真などが白黒印刷です。

質問：（男性）加藤学園におけるイメージ教育にかかる人件費の比率はどうなりますか。

加藤講師

イメージ・クラスだけ切り離れた人件費は計算していません。が、専門家の指摘によると、他の学校に比べて高いようです。私どもの学校は創成期なものですから、教科書の翻訳などにお金がかかりました。現在500名の生徒が800名に増えれば黒字になるのではないかなと思います。採算がとれるようになるのではないかと思っています。

質問：（続き）普通は、人件費はトータル費用の6割ぐらいが採算ラインだと聞きましたが。

加藤講師

いろいろの計算方法がありますから一概には言えないんです。ですが、イギリスで、5、6年教師経験のある者を採用する給料は、ポンド換算すると、イギリスの校長の給料と同じぐらいです。オーストラリアは年間人件費が、200万円から300万円だそうですが、その何倍も出します。だからいい先生がとれる。でも、日本人の先生を採用したくなくなることもあります。給料は高くても終身雇用で、休まず、働かず、悪い事をしないと首にできないのですから。

司会：今日ご出席の方は気になさらないように、お願いします。

質問：（女性）加藤学園では、たとえば、小学校などで問題化している学級崩壊などでも、何か対策をしているんでしょうか。

加藤講師

私どもは私立学校です。子供を入学させるとき、ある基準を設けて選抜しています。子供の興味、関心を引くようにしているので、子供は学校が楽しくてしょうがない。学校が好きなんです。ですから、学級崩壊、いじめ、などは起こりません。私どもの学校へ来てみてください。子供の表情が本当に明るいですよ。

司会：私は、これほどまでに活発なクエスチョン・アンド・アンサーを知りません。

質問：（女性）教科書のお話を聞きたいんですけども、国語、社会は翻訳してるんですか。

加藤講師

国語はしていません。社会科も、歴史とか地域に関わりのあることは、日本語のまま使っています。その方が能率的でやりやすいものですから。柔軟に対応するようにしています。

司会：資料の後ろの方に、船橋論説委員の「根付く『イメージョン』英語教育」に詳しく、どれとどれを英語でしているか書いてあります。

加藤講師

それに関して、船橋さんの記事は誤解があるようです。レギュラー・クラスの英語の授業をみて、このクラスの生徒は消極的だ、発言が少ない。と書いてあるんですが、これは、中学生になってから英語の授業を始めた生徒が大半なのでそうだったということです。

意見：（男性）私、加藤学園の授業を2度拝見させていただきました。まあ、子供の顔が美しい。本当に楽しそうです。どのクラスにいても気持ちいいんですよ。第三者の意見としては、学園長のおしゃる以上に、行ってみて気持ちよかったです。

質問：（女性）親が加藤学園を選ぶと思いますが、こういった家庭環境のお子さんがあるんでしょうか。親は子供の未来に何を望んでいるのでしょうか。だいたいいいんですが。日本に対しては、どんなことをやろうとしているのですか。

加藤講師

多少授業料が高いくから、経済力豊かな家庭が多いようです。医者、弁護士などの専門家の方は英語教育に対する期待度が大きいようです。将来は、活躍する舞台は日本だけじゃないという子供が出てくるでしょう。一方、親御さんとか子供たちの要望もあって、日本の伝統文化に触れさせる、まずお茶、お花、焼き物ですね。これに外国人の先生が興味を示すんです。グローバル化というのは、自分たちの所属する地域の文化に目を向けるということでもあると思います。

司会：ありがとうございます。そろそろ時間でございます。先生には、長時間にわたる貴重なお話ありがとうございました。加藤学園のさらなる発展と、今後ともつくばにご尽力、ご指導いただきたいということで、一同の皆様の拍手で、感謝とさせていただきます。

加藤講師

すばらしい機会を与えていただきまして、感謝しております。ありがとうございました。